❷学生の就職活動

学生の活動量や内定状況の実態は?

半数以上の学生が第1志望群に入社予定

民間企業を対象に就職活動を行った学生のうち、2019年11月時点で民間・民間以外を問わず就職先が確定している学生は87.7％（グラフ❶）。19年卒の18年12月時点の割合（87.8％）と同水準だった。このうち、当初からの第1志望群に入社予定の学生は52.8%で、過半数を占めた（グラフ❹）。

就職活動の開始時期については、卒業年次前年の「6月以前」が20年卒では17.9%で、現行の採用スケジュールが開始された17年卒（6.4％）から11.6ポイント増えており、前倒し傾向が見られる（グラフ❷）。なお、何をすることで就職活動を開始したと捉えているかについては、「就職に関する情報収集」が最も多く、75.2％。次に、「企業研究（業種・職種研究を含む）」（46.6％）、「自己分析」（46.0%）などが続いた。また、実質的な就職活動期間は、平均6.38カ月だった。

1社以上内定を取得した学生の平均取得社数は2.35社（グラフ❸）。最初の内定取得後も就職活動を継続した学生は52.0%（P13・グラフ❻）であり、理由として最も多かったのは、「より志望度の高い企業の選考を受けるため」で78.7％（P13・グラフ❼）。次に、「内定取得先の企業でいいのか不安に感じたため」（26.6％）などが続いた。

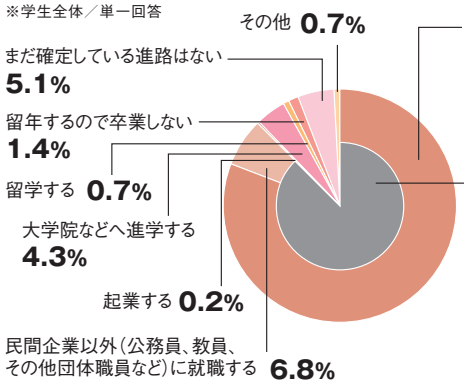
活動のプロセスごとの実施率、実施数を17年卒と比較すると（P13・表❺）、「プレエントリー社数」が24.79社と約13社減少し、「個別企業の説明会・セミナー（対面）」が約11社と約4社減少。ほかの多くのプロセスも減少している。平均内定取得社数はほぼ同じことから、活動量の減少の内定取得への影響は見られなかったことがわかる。

また、就職先を確定する際に決め手になった項目として最も多くの大学生が挙げたのは、「自らの成長が期待できる」で56.1％（P13・グラフ❽）。次に、「福利厚生（住宅手当等）や手当が充実している」（35.0％）、「希望する地域で働ける」（34.3%）などが続いた。

学生 9割近い学生が就職先を確定

❶ 卒業後の進路確定状況（2019年11月時点）

※学生全体／単一回答

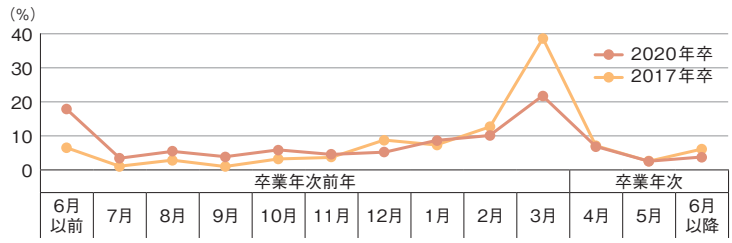


就職・計 **87.7%**
2019年卒 87.8%
2018年卒 88.4%

「民間企業に就職する」「民間企業以外に就職する」の合計は87.7%。一方、「まだ確定している進路はない」は5.1％と、低い水準であった。

学生 2割近くが卒業年次前年の6月以前に活動を開始

❷ 就職活動の開始時期 ※就職活動終了者／単一回答

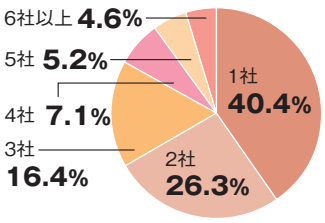


卒業年次前年の6月以前に開始している学生は17.9%。また、卒業年次前年の2月以前に開始している学生は65.7%で、17年卒の46.0%に比べて19.7ポイント高い。

学生 約6割が複数の企業から内定を取得

❸ 内定を取得した企業数

※2019年11月時点で内定を取得している学生／実数回答



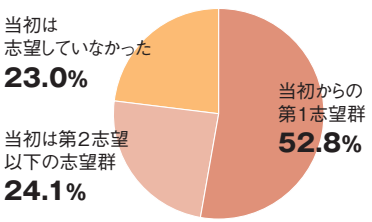
平均 **2.35社**
2019年卒 2.36社
2018年卒 2.54社

複数の企業から内定を取得した学生は59.6％。19年卒は60.1%、18年卒は59.5%、17年卒は55.0%で、ここ3年ほど約6割で推移している。

学生 半数を超える学生が当初からの第1志望群に入社予定

❹ 入社予定企業の就職活動当初の志望状況

※就職先確定者／単一回答



19年卒と比較すると、「当初からの第1志望群」は0.7ポイント増加、「当初は第2志望以下の志望群」は2.9ポイント減少、「当初は志望していなかった」は2.1ポイント増加した。

学生 個別企業の説明会・セミナー（Web上）への参加を除いた平均実施数が、17年卒から減少ないし横ばいに

⑤ 就職活動プロセスごとの実施状況

※実施率：学生全体／それぞれ単一回答、平均数の対象：各プロセスを実施した学生／実数回答　※（ ）内の数値は2017年卒との差

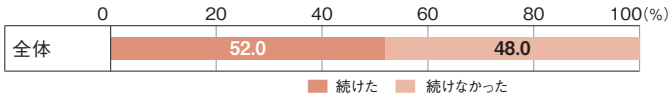
		2020年卒		平均数（実施者ベース）					
	実施率（%）	n=1904		① 2020年卒		② 2017年卒		①−②	
就職に関する情報を収集する		83.2	(7.9)						
OB・OGなど社会人の先輩を訪問する		20.0	(4.2)	n=381	3.06 社 4.41 人	n=363	2.75 社 4.45 人	0.31 社 −0.04 人	
リクルーターと接触する		21.0	(3.0)	n=400	3.38 社 5.11 人	n=413	3.45 社 5.23 人	−0.07 社 −0.12 人	
プレエントリー（企業・各種団体等への個人情報提供）をする		41.8	(−8.8)	n=797	24.79 社	n=1161	37.91 社	−13.11 社	
大学で開催される合同説明会・セミナーに参加する		40.6	(−13.1)	n=773	3.48 回	n=1232	5.08 回	−1.60 回	
大学以外で開催される合同説明会・セミナーに参加する		38.9	(−12.5)	n=741	4.46 回	n=1179	5.43 回	−0.97 回	
個別企業の説明会・セミナー	対面（社内、会場など）で開催されるものに参加する	34.5	(−13.6)	n=658	11.25 社	n=1105	15.22 社	−3.97 社	
	Web上で開催されるものに参加する	18.9	(−3.9)	n=360	4.60 社	n=524	3.19 社	1.41 社	
エントリーシートなどの書類を提出する		54.7	(−8.2)	n=1042	12.36 社	n=1444	16.23 社	−3.87 社	
適性検査・筆記試験を受ける		50.4	(−10.2)	n=960	8.36 社	n=1391	11.02 社	−2.66 社	
面接など対面での選考を受ける		54.8	(−5.5)	n=1044	7.84 社	n=1384	9.39 社	−1.55 社	
内々定・内定を取得する		85.4	(3.2)	n=1626	2.35 社	n=1886	2.22 社	0.13 社	
参考）インターンシップへの参加		62.2	(18.5)	n=1184	4.53 社	n=1003	3.07 社	1.46 社	

17年卒と比較すると、「OB・OGなど社会人の先輩を訪問」の平均訪問社数と「個別企業の説明会・セミナー（Web上）に参加」の平均参加社数は微増したが、そのほかの活動の実施数は減少。一方、実施率は「就職に関する情報を収集」「OB・OGなど社会人の先輩を訪問」「リクルーターと接触」で増加した。

学生 約半数が、最初の内定を取得した後も就職活動を継続

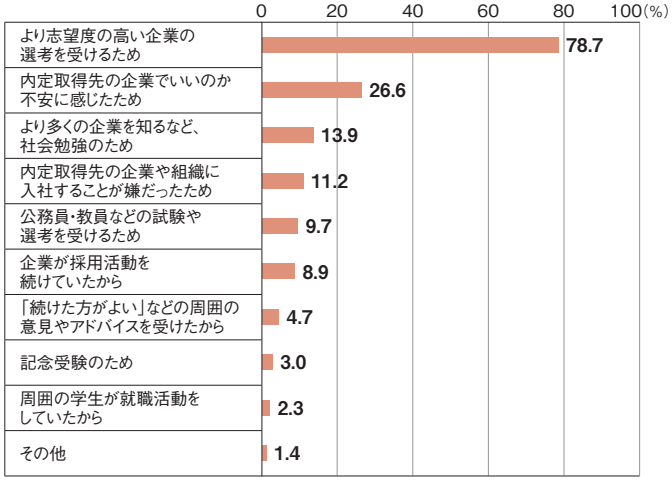
⑥ 内定取得後の就職活動継続状況

※内定取得者／単一回答



⑦ 内定取得後の就職活動継続理由

※最初の内定取得後、就職活動を継続した学生／複数回答

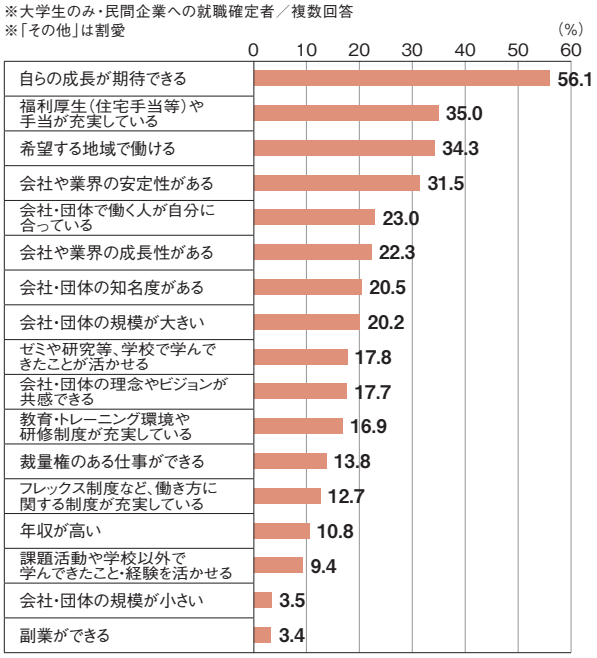


継続理由として最も多かった「より志望度の高い企業の選考を受けるため」は、19年卒（70.6%）から8.1ポイント増加した。

学生 「自らの成長が期待できる」を就職先の決め手に挙げた学生が半数以上

⑧ 就職先を確定する際、決め手になった項目

※大学生のみ・民間企業への就職確定者／複数回答
※「その他」は割愛



「自らの成長が期待できる」に続き、「福利厚生」「勤務地域」「会社や業界の安定性」などが上位に入った。

（2020年卒学生　就職プロセス調査　3月卒業時点調査）

❷学生の就職活動

学生が就職活動にかける費用、労力や、学業への支障の度合いは?

約6割の学生が「活動期間が長い」と感じている

P12で学生の活動量が17年卒に比べて減少傾向にあることを紹介したが、学生自身は、就職活動の負担感をどう受け止めているだろうか。かかる費用、期間、労力について、それぞれどのように感じているかを尋ねた(グラフ❶)。

費用について「かかる費用は大きい」に「近い」「どちらかというと近い」と回答した学生は70.0%、労力について「労力が大きい」に「近い」「どちらかというと近い」と回答した学生は76.1%。いずれも17年卒と同水準で、7割を超える学生がかかる費用、労力の大きさを感じている状況は変わっていない。

次に、期間について「かかる期間は長い」に「近い」「どちらかというと近い」と回答した学生は62.4%で、17年卒(55.9%)から6.5ポイント増加した。20年卒と17年卒は同じ採用スケジュールだが、17年卒よりもインターンシップに参加する学生が増えていることや、インターンシップ参加時期は卒業年次前年の夏～秋が最も多いことなどが影響している可能性がある。また、属性別に見ると、「文系・男性」の55.8%に対して「文系・女性」は68.7%、「理系・男性」の59.3%に対して「理系・女性」は68.1%と、女性の方が男性に比べて「長い」と感じている人の割合が高かった。なお、ほか2項目においても、同様の傾向が見られた。

次に、学業への影響を見てみる。就職活動やインターンシップによって学業に支障が生じたかどうかを尋ねたところ(グラフ❷)、「履修登録」「単位取得のための課題・試験」においては、「支障が生じた」「やや支障が生じた」学生の合計(以下、「生じた・計」とする)は前者が20.8%、後者が26.3%だったが、「授業への出席状況」においては39.4%と、4割近い学生に支障が出ていたことがわかった。属性別に見ると、文系学生では45.1%と、理系学生(30.5%)に比べて高かった。また、「卒論、卒業研究、修論」における「生じた・計」は34.0%だったが、大学・大学院生別に見ると、大学院生におい

学生 約6割が「就職活動にかかる期間は長い」と感じている

❶ 就職活動にかかる費用、期間、労力 ※全体／単一回答

	A					B	A・計	B・計
費用	就職活動にかかる費用は大きい					就職活動にかかる費用は小さい		
2020年卒	41.7	28.3	21.2	6.1	2.7		70.0%	8.8%
2017年卒	41.3	31.8	18.7	6.1	2.0		73.2%	8.1%
期間	就職活動にかかる期間は長い					就職活動にかかる期間は短い		
2020年卒	32.3	30.1	27.0	7.3	3.4		62.4%	10.6%
2017年卒	26.1	29.8	27.2	12.1	4.8		55.9%	16.9%
労力	就職活動は、労力が大きい					就職活動は、労力が小さい		
2020年卒	46.0	30.1	18.0	3.5	2.4		76.1%	5.9%
2017年卒	44.6	33.1	15.9	4.9	1.5		77.7%	6.4%

(%)

Aに近い／どちらかというとAに近い／どちらともいえない／どちらかというとBに近い／Bに近い

「A・計」の割合を属性別に見ると、いずれの項目においても、「文系・男性」よりも「文系・女性」で、「理系・男性」よりも「理系・女性」で高い。

学生 約4割が、授業への出席に「支障が生じた」と回答

❷ 就職活動の学業への支障 ※全体／単一回答

						生じた・計	生じなかった・計
履修登録	7.5	13.3	33.0	39.6	6.5	20.8%	72.7%
授業への出席状況	12.6	26.8	28.4	27.0	5.2	39.4%	55.4%
単位取得のための課題・試験	9.8	16.5	32.9	34.5	6.3	26.3%	67.5%
卒論、卒業研究、修論	13.3	20.7	28.5	28.5	9.0	34.0%	57.0%

(%)

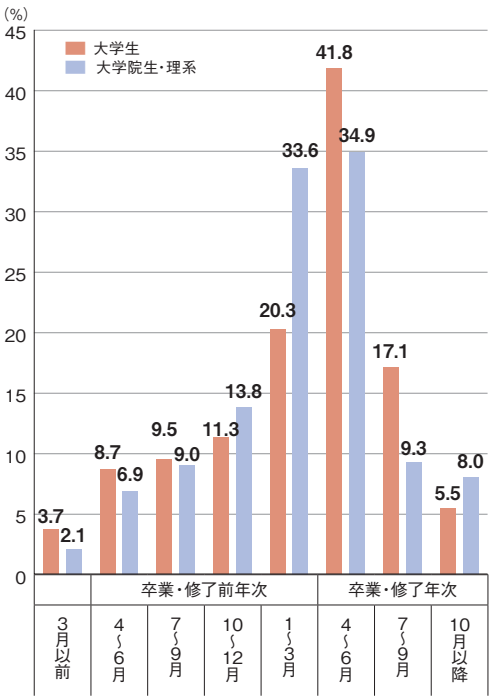
支障が生じた／やや支障が生じた／あまり支障は生じなかった／支障は生じなかった／実施していない／するつもりがなかった

17年卒と比較すると、「授業への出席状況」の「生じた・計」は39.4%で変わらず、「卒論、卒業研究、修論」の「生じた・計」は38.7%で、20年卒よりも高かった。

学生 学業に支障をきたした時期は卒業・修了年次4～6月

❸ 就職活動・インターンシップが学業に支障をきたした時期

※全体／複数回答



「大学生」「大学院生・理系」とも、学業に支障をきたした時期は卒業・修了年次の4～6月。「大学院生・理系」の場合、1～3月も大学生に比べて割合が高かった。

ては47.8％と約半数を占めた。修論執筆のための研究と就職活動の両立の難しさがうかがえる。

なお、具体的に支障をきたした時期は、大学生においては、「卒業年次4～6月」が最も多く、41.8%。大学院生・理系においては「修了前年次1～3月」が33.6%、「修了年次4～6月」が34.9％だった（P14・グラフ❸）。

活動にかかった金額の平均は12万8890円

次に、就職活動にかかった金額について詳しく見てみる。就職志望の大学生のうち、就職活動全体にかかった金額の平均は12万8890円（データ❹）。17年卒の17万960円に比べると減少しており、金銭面の負担は減ってきていると言える。ただし、地域によって差があり、最も高かった「九州」（15万6989円）、次いで「北海道・東北」（14万861円）から、最も低かった「関東」（11万7374円）まで幅が見られた。

なお、金額の分布を見ると（グラフ❺）、最も多かったのは「10万円以上20万円未満」で30.0%。次いで「5万円以上10万円未満」が29.0％だった。平均金額が高い「九州」「北海道・東北」においては、20万円以上かかった人がそれぞれ27.0%、24.0%であり、およそ4人に1人を占めた。

費目ごとに見ると、交通費について地域間の差が大きく、全体平均は4万9467円だったが、最も低い「関東」（3万7157円）と最も高い「九州」（7万9383円）で約4万円の差があった。なお、九州の次に金額が高かったのは「中国・四国」で7万990円、次いで「北海道・東北」が6万8624円だった。

保護者から援助を受けた金額についても尋ねたところ、全体平均は6万5538円。地域別に見ると、最も高かったのは「北海道・東北」で9万9079円。次に「近畿」の7万2097円、「中国・四国」の6万7604円が続き、最も低かったのは「関東」で5万8152円だった。就職活動にかかった金額が最も高かった「九州」は、5万9502円だった。

学生 3割の学生は、10万円以上20万円未満の金額が就職活動にかかっている

❹ 就職活動にかかった平均金額

※平均金額の集計対象：各項目で「1円」以上を使用した大学生／実数回答
※使用率：「1円」以上を使用した大学生／それぞれ単一回答
※項目ごとの平均額のため、各項目の合計は「活動全体」の金額とは一致しない

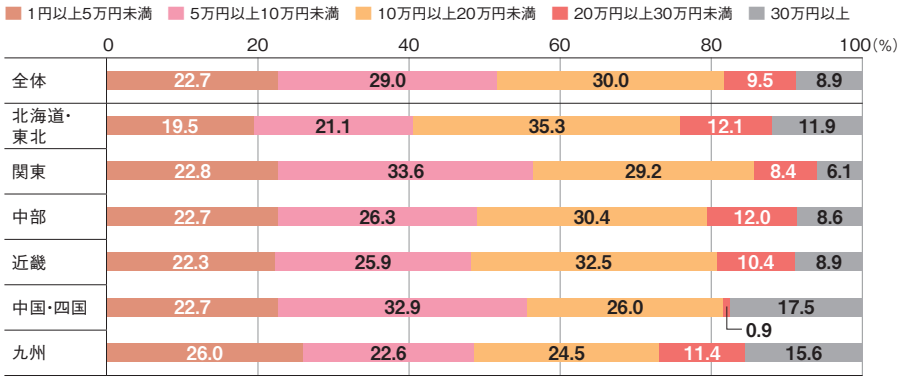
活動全体　12万8890円

交通費	4万9467円（使用率98.2%）	書籍費	5697円（使用率63.1%）
被服費	3万6869円（使用率86.6%）	公務員試験対策費	10万5195円（使用率10.9%）
宿泊費	2万7059円（使用率20.5%）	スキルアップ費用	2万3847円（使用率28.7%）
飲食費	1万2488円（使用率87.3%）		

17年卒と比べると、被服費で約4000円、宿泊費で約3000円、スキルアップ費用で約4500円減少している。

❺ 就職活動にかかった平均金額（地域別分布）

※「1円」以上を使用した学生／実数回答



地域別に見ると、「北海道・東北」「中部」「近畿」は「10万円以上20万円未満」が最も高く、「関東」「中国・四国」は「5万円以上10万円未満」が最も高かった。

（2020年卒学生　就職プロセス調査　7月1日時点調査）

就活に40万円以上。移動時間の負担も大きい

●ベンチャー企業内定／経済学部

先輩の勧めでインターンシップに挑戦するうちに大人や社会に触れることが楽しくなり、50社近くに参加。多くは福岡実施でしたが、住んでいる長崎からは高速バスで片道2時間、2000円近くかかります。東京では、往復で3万円。ほかの企業も一緒に受ける、就活支援サービス利用など節約しても、40万円以上かかりました。多くの企業を見たことで、成長スピード優先という軸を確信し、入社予定企業に納得しています。

配属部署について十分な情報を得られた

●エンターテインメント業界内定／工学部

自分が働くイメージを持てない、入社後携わる業務があいまいな企業は、学生に人気がある企業でも魅力を感じませんでした。入社予定の企業では、最終面接前日に人事・配属希望部署の社員・卒業間近の内定者の先輩と話す機会をつくっていただけました。詳しい話を聞くことができ、自分がそれまで持っていたイメージと差がないと実感。配属先の部署が決まっていたことも安心感につながりました。